って、この第二のタイプの教師になってしまうことはかえって教育の本質から遠くなってしまうのであるが、こうした教師は、不幸にして、一番自分自身のことがわからないのである。何か苦情が出れば、自分の教育目的を理解してもらえなかったのだと悲しむだろうし、感謝されれば、教師としての喜びにひたるのであるが、そこには、しばしば「教師」という形骸しか残らない。

今、かりに二つのタイプだけをあげたのであるが、性格学の立場からはもっと多く類型化することができる。ここでは例をあげたのに過ぎない。

次には、教育学の立場で考えられている教師のタイプをあげてみよう。

ミュラーフライエンフェルス氏は、次の四つの類型をあげた。

(一) 博識をもっている学者型

(二) その主な意向が外面的形式を正確に遵守することに向けられている官僚型

(三) 厳格な紀律や挙動を維持することをその喜びとする将校・下士官型

(四) 生徒の内面生活に愛情をもって入りこんで行く牧師型

性格学の複雑な考え方とはちがって、この方はわかりやすい。

しかし、どの類型に自分がはいるにせよ、教師が自分自身をよくみつめるためには、ゆとりを持って、むしろ教師の類型からは、はなれて、人間として、自らを見出すことが一番大切なことではないかと思う。

教育心理学の方では測定技術が発達してきて、子どもが先生をどう思っているかを統計的に調査している。

また臨床心理学や精神分析学の方では、教師の個々の内面的な性格に深くメスをいれて、自らの性格を知るのに役立ち、また性格をゆがみのない方に導いて行くこともできる。

しかし、先生方が、それによって直ちに自らを知り、よりよい教師になれるかと言うと、なかなかそうも行かないのである。

ミュラーフライエンフェルス氏があげている類型にしても、それぞれ長所と短所になる場合もあって、どれが一番よいとは、決定的には言えないし、各々の教師は、すこしずつそのどの要素をも持っているのである。

やはり結論としてはクロー教授が言うように、自分自身の人格を高めることで、これが自然に自分への理解になるのではないだろうか。

川村短期大学

帆足喜与子

他人を理解することは精神発達の順序からいって、自分自身を理解することに先だつと一応考えられる。しかし、理解という

語をよくよく考えはじめると、自分自身がわからないで他人を理解することができるだろうかと気がついてくる。児童期までは、人間は自分より外側の世界をよく理解するが、成人にとって、自分の理解と他人の理解とを切りはなすことはできない。常に両者はささえあう関係に立っている。

教師が自分自身を理解することは子どもを理解することにつながっている。教師にとって、自分の理解が深まったということは子どもの理解が深まったということにほかならない。

常々私は、教師は自分の行動を説明しえなければいけないとおもっている。文学者は描写し、感じを述べることにおいて自分を知るであろうが、教師は相手の子どもの発達を助長するために適当な行動をした、という自覚を持つことにおいて自分を知るのだとおもう。なぜ自分は他のやり方をしないでこのようやり方をしたのか、あるいは、しようとするのか——それを知ることによって教師としての興味も出てくるとおもう。

教師の適当な行動が期待されるもととなる条件は、教育の場においては、相手の子どもの発達程度、相手のパーソナリティ、相手のおかれている事態、それに至るまでの成り行き、それと、これに関与する教師のパーソナリティとその心理学的、教育学的知識とである。こういう条件の上に教師の一定の行動が生れて来るのである。だから私たちは相手の一人一人の子どもの心身の発達程度をつぶさに観察して、子どもを知る必要がある。児童心理学と発達心理学は観察の助けとなりよりどころとなる。また相手の個性を見る必要がある。個人によって、身のまわりのことはよくできるが、リズムの感覚はよくないとか、人の話をよくきくが、それだけに神経質すぎるというふうなことや、それぞれの感じ方のくせ、ことばのくせ等、あらゆる面にわたって個性的特徴をひろい上げてみることである。また相手が現実におかれている事態の構造をはあくしなければならない。こうした条件のそろった上に教師自身のパーソナリティに限定され、彼の教育的知識に導かれて、教師は行動するわけである。

ところが私たちは完全では決してない。適当だとおもってなした行動が効果をあげないことが多くある。子どもの関心をひき出そうとおもったのに結果が逆になってしまったり、なだめるつもりが攻撃をひきおこして収拾がつかなくなったりして、自ら驚き自信を喪失しもする。この時、自分の何がいけなかったのかを反省することによって教師はめざめるのである。相手の発達程度の認識や個性の観察についてかえりみ、再び知識の整理をし、この次、子どもに向ったときには、自分の認識・態度を改めようとする。この過程において教師は自分自身を以前より一歩進んで理解したことになる。これが先だつことによって相手に対する理解も進むのだといえよう。

このように自ら気づいて失敗を見出すことは比較的容易であるが、他からつっつかれる等刺激が横合から来た時に行動をふりかえったり、正しく転回したりすることはなかなか簡単ではない。例えば、父兄からもっと何々をしてほしいとか、保育をこうしたらいかがですか、などといって来る。思いがけない質問をかけられたりする。また、教師同士で、考え方、やり方がちがうために相談がまとまらず共同の仕事がうまくゆかないこともある。こういう横合いからのチェックも、至る時、至る所におこる。この時また一つの重大な分れ目——自分自身を一段と理解するようになるか、それともものとのレベルでとどまるかの分れ目に立つのである。この危機の処置は非常にあやまられやすいので、もし合理的に処理するなら、教師は現在の実情より、もっともっと実力を持ち、知識も豊富になっているとおもうのである。チェック・にあったとき、あの父兄はよく知りもしないのにやかましくさしでがましい、と思ったり、他の教師との間のことでは自分が先輩なのだ、と先輩であるというだけのことにより現実に目をむけることを回避したり、職責上の地位をかさに着たり、幼稚園として団結するというそのことだけで外からの刺激に防衛体制をつくったりする。一応いかにも幼稚園内部で助け合っているようである。面子に支えられることによって自信を失わずにすんだようにおもう。だがこれはあまりにも盲目で内容に乏しい。この時に折角の自分を理解するよい機会が失われてしまう。よい機会というわけはこうである。人間は一体どんなに自覚的であろうとしても、いつもいつも自分の行為の理由を考えているわけにはいかない。目前にとっさにおこる事柄に対してとっさに反応していることが大部分である。少し他からつっつかれなければ、自分の行動は考えなおされることもなく、意にとめられないまま流れ去っていくであろう。

他からの刺激でチェックされたときに、防衛体制にかくれずに、自分の行動を説明するようになりたいものだとおもう。私たちは他からつっつかれるとまず防御することが先になり勝ちだが、自分の行動を説明してみると相当に合理的に説明しうる。思った以上に適当な行動をしていたことに気がつくものである。よく説明できれば知識が自分のものとなり、自信が強められ、つぎの行動が一段と合理的に進歩するのである。時には素人の意見はすばらしく暗示に富んでいることがある。よかれあしかれ他からの意見を尊重したい。

さてもう一つ別の面から自分を理解する手段を附加しておこう。教師としての行動を限定するものに自身のパーソナリティがあって、これは行動をかたよらせる要因になる。それゆえ自分のパーソナリティを知ることは大切なこととなる。内向性であるか、外向性であるかとか、分裂質の度、循環質の度、男性度、女性度などがどんな割

合に存するかなどを検査によって知っておくことは有意義である。あまり極端な特徴は矯正するようにつとめるよすがとなるし、自己の行動を必然と肯定するに役立つこともある。

また、現在フィルムは相当普及しているが、これが自由に使用できるようになり、教育の場における姿を映してみることができるようになったら、自分の理解は大いに拡げられるだろう。特に幼稚園や小学校低学年の教師は皆これをやりたい。相手とむきあっているときの姿勢が適当であるか、どんな表情をのぞかせるかなどについて、自分だけでは自分のことをあまりに知らなすぎる。すべての教師がフィルムによって自分の姿を眺め、テープレコーダーも盛んに使用し、正しい仕方によって自分らを分析研究したら、教育の場はその後相当に変化すると想像される。

教師が自分自身を理解するについて、自分の行動を理由づけることの大切であることと、客観的に自分を知る方法の二、三を述べた。前のことと、後のこととはいささか次元を異にするものではあるが、二つとも最も重要な事柄なので、ならべて挙げてみたのである。

二子幼稚園

河尻朋子

教師の生活も、馴れきってしまうと、知らず知らずのうちに型にはまったものになり、型から自分をはずして眺めることが困難になってきます。自分のしていることは、ほんとうに子どものためになっているでしょうか。子どもの自発性を妨げないようにと、そればかり頭にあって、いつの間にか子どもにひきずられていたり、あれこれと「きまり」を守らせることにとらわれて、知らぬ間に、のばしてやらなければならない芽をふみにじっていたりすることはないでしょうか。私は、過去二年をふり返ってみて、ある時は目標にとらわれ、自分ばかり先を急いで子どもたちとの隔りにも気づかなかったことを思い、ある時は子どもたちに先を越され、追いつこうとして息を切らしたことを思い、子どもたちと共に歩くことのむずかしさを、今さらのように感じています。子どもと共に歩こうとすれば、教師は、子どもの心の動きをしっかりとらえていなければならないと同時に、自分自身が目標に向かって何をなすべきかを理解しておかけなればならないでしょう。教師は、子どもといっしょに遊んだり仕事をしたり、どんなに子どもの近くにいても子どもの心の動きには敏感であり、冷静な判断をくだすことができます。しかし、自分自身に目を向けた時、自分の心はとらえがたく、どうすればよいかと思い迷うことも出てくるでしょう。ある子どもについて知りたいと思えば、その子どもについての